

中村初雄 監修
前島重方

図書館学シリーズ 8

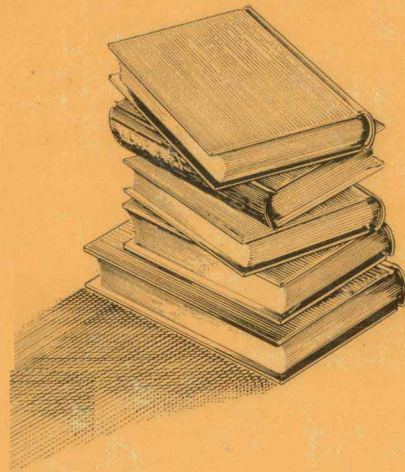
情報管理

—情報と図書館の機械化—

牛島悦子 田中 功

渡辺敏一

共 著



樹村房

JUSONBO

中村初雄 監修
前島重方

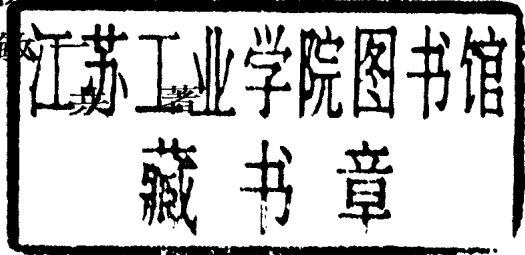
図書館学シリーズ ⑧

情報管理

—情報と図書館の機械化—

牛島悦子 田中 功

渡辺敏



樹村房

JUSONBO

[シリーズ監修]

中村初雄 慶応義塾大学名誉教授
なかむらほつお 元日本図書館学会会長

前島重方 国学院大学教授
まえじましげみち

[執筆 者] (執筆順)

牛島悦子 (うしじま・えつこ)
1933 東京都に生れる
1955 東京女子大学文学部卒業
1961 ミシガン大学大学院図書館学科修士課程修了 (MALS)
日本科学技術情報センター渉外調査室長代理, 独協大学講師などを経て,
現在 白百合女子大学文学部助教授
国立国会図書館参考書誌部客員調査員
主著 「科学文献 まとめ方, さがし方, 利用の仕方」(共著) 南江堂, 「情報管理実務講座 第12巻」(共著) 日刊工業ほか

渡辺敏一 (わたなべ・としかず)
1944 福島県福島市に生れる
1967 東北大学文学部卒業
1968 図書館短期大学別科 (特別養成課程) 修了
現在 東京女子大学短期大学部図書館勤務
私立短期大学図書館協議会事務局長
田中 功 (たなか・いさお)
1942 東京都に生れる
1964 慶応義塾大学文学部図書館学科卒業
現在 日本科学技術情報センター東京支所長代理
産業能率短期大学講師 (非)

図書館学シリーズ 8

情報管理—情報と図書館の機械化— 定価1,600円

昭和60年4月1日 初版発行

検印廃止

著者◎ 牛島悦子
渡辺敏一
田中 功
発行者 木村 繁

発行所 藝文社 樹村房
JUSONBO

〒112 東京都文京区小石川5丁目6番20号
電話 東京 (03) 946-2476(代)
振替口座 東京 9-93169

製版印刷・前野印刷/製本・愛千製本所

ISBN 4-915507-77-7

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

監修者のことば

戦前の図書館令にかわって、図書館法が公布されたのは昭和25年4月30日のことである。昨年はその30周年記念が祝われもした。“図書記録の類を蒐集保存して、公衆の閲覧に供し……”とあった図書館令の目的は抜本的に広げられ、より自由に利用できるようになった。更に図書館に配置さるべき専門的職員の資格を銘記したことも、図書館法の特長である。専門的職員の資質向上こそが図書館発展の前提であるということは、公共図書館、学校図書館といわず、あらゆる図書館についていえることである。

昭和52年の調査によると、131の大学、101の短期大学から、7,500人の司書資格取得者が社会におくりだされている。にもかかわらず、図書館・資料室に就職するものはそのうち6パーセントにも達していない。いまだに、図書館法第6条、いわゆる司書講習による資格取得者にたよらざるを得ないという状況である。大学教育におけるこの非効率のおこる原因の一つに、適切なテキストブックがない、ということがあげられよう。個々には良い参考書、専門書が存在しながらも、使いやすいテキストブックが少なかったようである。それは“図書館学が現場をふまえての実学である”ということの認識においてギャップがありすぎることからきたのではなからうか。観念的内容をと願望するアカデミズム、それとは対照的な、役立つ度合こそ評価基準という、現場における技術観の間の調整、更にまた羅列・網羅主義からくる過密内容をどう整理していった、大学教育の課程で充当された時間にあてはめていくかの調整も必要である。司書には、ひろい一般教養、語学力、更にまた特定主題分野の知識もという期待も無視できないからである。

そのような調整をはかることは、われわれ単独の微力ではよく成しとげることはできない。それで何人かの教育経験者と実務家との討議を通じて執筆していく方針をとった。時には関連科目の方々の参加も得て集団討議も必要となることもあろう。この方針に理解を示された、木村繁氏を出版者に得て、我々は第一期、9冊を企画した。

われわれの企画の目標は、ワークブック、作業指針といったものではなくて、読みかつ考えていくためのテキストブックである。しかし学生諸君だけでなく、既に図書館の仕事に従事しておられる方々にも役立つことを願っている。

1981年2月

監修者 中村初雄
前島重方

序 文

司書課程科目「情報管理」については、テーマそのものの解釈、範囲も必ずしも明確にされておらず、情報検索、情報システムなどについての類書は多いが、この科目のテキストとして書かれたものは他の科目に比べて少ない。

現代は、情報化社会と呼ばれるようになって久しく、コミュニケーション技術の急速な進歩によって、図書館をとりまく環境にも大きな変化をもたらしている。本書執筆中の1984年後半には、情報の宅配システムともいべき新キャブテンシステムの実用化、高度情報通信ネットワークの実現を目指してのINS (Information Network System) の実験開始など、画期的な技術開発の試みがつぎつぎに打ち出され、全国図書館ネットワーク形成へのステップとして国立国会図書館による和図書データベース (JAPAN-MARC) の対公共図書館オンライン利用実験が開始され、さらに、「電子図書館システム」建設構想を郵政省が21世紀の図書館システムとして推進する方針を打ち出すことなどが新聞(1985.1.18)で報ぜられた。

このような流動的な時期に、本書のテーマである“情報管理”に関するテキストを執筆することは多くの点でむずかしく、日進月歩の技術開発により、本書が発行される頃にはすでに新しい状況となり、改訂、補筆すべき点が発生することも容易に予想される。

本書は、司書課程の学生や、図書館の現場で情報化の進展、業務へのコンピュータ導入のインパクトに現在直面しておられる方々に対して、情報と資料、図書館業務へのコンピュータ利用、オンライン情報検索などについて、現在までの実施例にもとづいて、基礎的な理解を与える入門書としての役割を果たすテキストとなることを目指した。また、執筆に際しては下記の点に留意するように努力した。

- (1) 情報、情報検索などにかかわる事項についてその解説や用語の利用に際して、なるべく他の司書課程科目や、図書館の現場で使われている用語との関連に言及する。

- (2) コンピュータ, その利用, 新しいメディアなどの技術的な説明は必要最小限にとどめるなど, 人文科学, 社会科学の素養をベースに持つ学生や図書館員にとって理解しやすく解説する。
- (3) “図書館学が現場をふまえての実学である” という本シリーズの認識に立ち, 基本的な理解と同時に, 現実に端末を前にして必要な文献を探したり, 身近かあるマイコンで市販ソフトを用いれば書誌データの入力ができる, といった初歩のマニュアルにもなるよう, なるべく具体例をあげる。

執筆者の現在の仕事の内容から, 第1章, 第2章, 第6章, 第8章を牛島が, 第3章, 第5章を渡辺が, 第4章, 第7章を田中が担当した。

もちろん, “情報管理: 情報と図書館の機械化” についてのテキストブックとして本書がすべてを網羅しているとは考えられず, 説明も不明確な点が多々あることと思うが, 執筆者一同, これからも努力を重ね, 読者のご教示を得て, よりよいものに稿を重ねて行きたい。

最後に, 原稿を詳細に通読して下さった監修者の中村初雄・前島重方の両先生, ならびに, なかなか期限が守れなかったにもかかわらず辛抱よく, 発行までに導いて下さった樹村房社長, 木村繁氏に深く感謝の意を表したい。

1985年1月

執筆者を代表して 牛島悦子

も く じ

シリーズの序

序 文

| | |
|-------------------------------|----|
| 第1章 情報管理と図書館 | 1 |
| 1. 情報とは..... | 1 |
| (1) 情報の役割..... | 1 |
| (2) 情報と伝達の意志..... | 3 |
| 2. 情報伝達の歴史..... | 4 |
| 3. 現代社会と情報管理..... | 5 |
| 4. 情報管理と図書館業務..... | 6 |
| (1) 情報処理システムと図書館..... | 6 |
| (2) 図書館専門業務と司書課程科目「情報管理」..... | 9 |
| 第2章 情報伝達メディア | 12 |
| 1. 情報伝達メディアの変遷..... | 12 |
| 2. 情報伝達手法の多様化..... | 13 |
| 3. 情報源と資料..... | 15 |
| (1) 情報源..... | 15 |
| (2) 資料..... | 15 |
| (3) 文献..... | 16 |
| (4) 資料の類別..... | 16 |
| 4. 資料の一次性・二次性..... | 18 |
| (1) 一次性..... | 18 |
| (2) 二次性..... | 20 |
| 5. 一次資料..... | 21 |
| (1) 論文——原著論文, 完全論文..... | 21 |
| (2) 予稿・プレプリント..... | 23 |
| (3) 学位論文..... | 23 |
| (4) 速報論文..... | 24 |
| (5) 特許明細書..... | 24 |
| (6) 未公刊資料..... | 25 |
| (7) 単行図書..... | 25 |
| (8) その他..... | 25 |

| | |
|------------------------------------|-----------|
| 6. 二次資料 | 26 |
| (1) 資料形態を単位として収録 | 26 |
| a. 全国書誌, 販売書誌 | 26 |
| b. 選定文献目録・解題・書評・翻訳・文献目録など | 26 |
| c. 所蔵目録, 総合目録(ユニオンリスト) | 26 |
| (2) 資料の形態を問わずに, 資料中の部分記事, 掲載論文など収録 | 26 |
| a. 専門書誌, 個人書誌, 集合書誌 | 26 |
| b. 叢書・全集細目索引 | 27 |
| c. コンテンツ・シート(目次速報誌), タイトル速報 | 27 |
| d. 索引誌・抄録誌 | 27 |
| (3) 資料の内容を評価し, 特定の観点から再編成するもの | 28 |
| (4) 二次資料の特性 | 28 |
| a. 網羅性と圧縮加工 | 29 |
| b. 経済性 | 29 |
| c. 変換性 | 29 |
| d. 迅速性 | 29 |
| 7. 情報伝達メディアの変容 | 30 |
| (1) 情報量の激増 | 30 |
| (2) 学問領域の細分化と伝達メディアの分散化 | 31 |
| (3) 一次情報の発行のおくれ | 32 |
| (4) 資料化にかかる経費の増大 | 32 |
| (5) 外況の変化に対する情報伝達メディアの対応 | 33 |
| a. 研究者相互の直接の対話の重視 | 33 |
| b. 伝達メディアとしての雑誌についての再検討 | 33 |
| c. レビュー文献の活用 | 34 |
| d. 二次資料の重視と研究者の協力 | 35 |
| e. コンピュータ導入による機械可読フォームのメディアへ | 35 |
| 第3章 図書館の機械化 | 37 |

| | | |
|-------------------------|----------------------|-----------|
| 1. | 図書館の情報処理システム | 37 |
| | (1) コンピュータ導入の必要性 | 37 |
| | (2) 図書館の情報処理システム | 38 |
| | (3) 図書館システムの形態 | 40 |
| 2. | コンピュータの機能と構成 | 42 |
| | (1) コンピュータの種類 | 42 |
| | (2) 基本機能 | 43 |
| | (3) ハードウェアとソフトウェア | 44 |
| | (4) 情報処理のしかた | 46 |
| | (5) プログラミング言語 | 47 |
| 3. | 図書館業務のシステム化 | 48 |
| | (1) 受入・整理 | 48 |
| | a. システムの特徴 | 48 |
| | b. MARC と受入・整理業務システム | 49 |
| | (2) 貸出業務システム | 50 |
| | a. システムの特徴 | 50 |
| | b. コンピュータ化の経緯 | 52 |
| | (3) レファレンス業務 | 53 |
| | a. システムの特徴 | 53 |
| | b. 現状と課題 | 54 |
| 第4章 データベース利用と図書館 | | 56 |
| 1. | データベース作成の経緯 | 56 |
| | (1) 日本の例 | 56 |
| | (2) 外国の例 | 57 |
| 2. | 図書館蔵書データベース | 58 |
| | (1) JAPAN-MARC | 58 |
| | (2) 学術情報システム | 61 |
| | (3) NIPS | 61 |
| | (4) 東販 PICS | 62 |
| | (5) OCLC | 62 |
| | (6) UTLAS | 63 |
| 3. | 文献情報データベース | 64 |
| | (1) JOIS | 64 |
| | (2) PATOLIS | 65 |

| | |
|-------------------------------------|-----------|
| (3) NEEDS-IR | 67 |
| (4) DIALOG | 67 |
| 第5章 マイコンと図書館業務 | 70 |
| 1. マイコンとは | 70 |
| (1) マイコンの定義 | 70 |
| (2) マイコンと図書館界 | 71 |
| 2. マイコンの機能と構成 | 72 |
| (1) マイコンの構成 | 72 |
| (2) 図書館用マイコンに必要とされる機能 | 73 |
| 3. マイコンの利用方法 | 75 |
| (1) マイコンのソフトウェア | 75 |
| (2) 簡易言語 | 76 |
| (3) マイコンとワードプロセッサ | 78 |
| 4. 図書館業務への適用例 | 78 |
| (1) 図書館業務へのマイコンの利用 | 78 |
| (2) 図書受入・整理業務 | 79 |
| a. 発注処理 | 80 |
| b. 納入・検収 | 81 |
| c. 受入・整理 | 81 |
| d. カードレス検索・その他 | 83 |
| (3) 逐次刊行物管理業務 | 84 |
| (4) 貸出業務 | 86 |
| (5) データ通信端末機としての適用 | 87 |
| a. マイコンとデータ通信 | 87 |
| b. 利用形態 | 88 |
| 第6章 情報の蓄積と検索 | 91 |
| 1. 情報検索とレファレンス業務 | 91 |
| (1) 情報検索とは | 91 |
| (2) レファレンス業務とオンライン情報検索の 導入 | 92 |
| 2. 情報の分析と圧縮変換 | 93 |
| (1) 主題の分析と情報圧縮のレベル | 93 |
| (2) 抄録の種類と作成法 | 96 |

| | |
|--------------------------------|------------|
| (3) 形態圧縮——マイクロフォーム | 98 |
| a. マイクロ化 | 98 |
| b. マイクロフォームと二次資料 | 99 |
| 3. 情報の蓄積 | 99 |
| (1) 索引化 | 99 |
| (2) 索引語 | 102 |
| a. 体系分類言語(コード) | 102 |
| b. 件名標目言語 | 104 |
| c. キーワード(フリーターム) | 104 |
| d. キーワード(固定) | 105 |
| e. 索引語統制 | 107 |
| 4. 索引ファイルと検索方式 | 109 |
| (1) 索引ファイルの構成と検索 | 109 |
| a. シリアル・ファイル | 110 |
| b. 転置ファイル | 110 |
| (2) 検索の原理 | 111 |
| a. 検索の基本論理 | 112 |
| b. トランケーション | 112 |
| 第7章 文献調査とオンライン情報検索 | 114 |
| 1. 印刷メディアとコンピュータ・データベースの 関係 | 114 |
| 2. 印刷メディアによる検索 | 117 |
| (1) 調査の種類 | 117 |
| a. 事実を調べること | 117 |
| b. 文献を調べること | 118 |
| (2) 調査のプロセス | 118 |
| a. 調査の受付 | 118 |
| b. 予備調査 | 119 |
| c. 二次資料の選定 | 119 |
| d. 検索用語の選定 | 119 |
| e. 調査の実行 | 120 |
| f. 文献リストの作成 | 120 |
| g. 利用者へ提示 | 120 |
| (3) 検索の実例 | 120 |

| | | |
|------------------|------------------------|-----|
| | 〔検索のプロセス〕 | 120 |
| 3. | コンピュータによる検索 | 126 |
| | (1) 検索のプロセス | 127 |
| | a. 検索の受付 | 127 |
| | b. 予備調査 | 127 |
| | c. データベースの選定 | 127 |
| | d. システムの選定 | 128 |
| | e. 検索用語の選定 | 129 |
| | f. 検索式の作成 | 129 |
| | g. 端末操作 | 130 |
| | h. 検索結果の出力 | 130 |
| | (2) 検索の実例 | 131 |
| | 〔検索のプロセス〕 | 131 |
| 4. | 検索結果の一次資料の入手 | 135 |
| | (1) 図書館間の相互貸借 | 137 |
| | (2) 文献複写サービス機関の利用 | 138 |
| | a. 国立国会図書館 | 138 |
| | b. 日本科学技術情報センター(JICST) | 139 |
| | c. 英国図書館(BLLD) | 139 |
| | (3) オンラインによる複写申込み | 139 |
| 第8章 今後の問題 | | 141 |
| 1. | 新しい情報メディア | 141 |
| | 〔参考文献リスト〕 | 142 |
| | (1) ビデオテックス | 143 |
| | (2) テレテキスト | 144 |
| | (3) 光ディスク | 145 |
| | (4) ファクシミリ伝送 | 145 |
| | (5) 超マイクロフィルム | 146 |
| 2. | オンライン検索によるフルテキスト提供 | 147 |
| | (1) 学術雑誌 | 148 |
| | (2) 新聞・百科事典など | 148 |
| | (3) エレクトロニック・ジャーナル | 149 |
| 3. | そして図書館は | 150 |

第1章 情報管理と図書館

1. 情報とは

われわれは現在、交通情報、お天気情報、就職情報など、“情報”という言葉をはひんびんと耳にしている。しかし、「情報とは何か？」と問われると、はっきりと答えることは案外むずかしい。

情報 (information) とは、必ず、伝達 (コミュニケーション) を前提として使われており、その内容はデータ、知識から、情報理論におけるビットにいたるまで多様な概念を伝えるので、明確な定義はむずかしい。ユネスコによる用語集¹⁾にも、information に対して“伝達される事実”に始まり5種類もの定義が与えられており、それぞれが使われる事例——記録情報 (recorded information)、機械可読情報 (machine-sensible information) など——によって異なる側面をもつことを示している (図1参照)。

(1) 情報の役割

われわれは“物質”を中心とする社会から“エネルギー”を活用する社会を経て、“情報”化社会に在るといわれている。あり余る膨大な情報に囲まれているといわれているが、これらは、個人にとりすべてが“情報”ではなく、その中で“個人にとって意味をもつ内容”のみが情報である。

情報とは、言葉や文字ばかりでなく、サイン、シンボル、記号など、物質やエネルギー以外の“何か”で、人と人との間のほか、人と機械、機械と機械や生体内部でも伝達される。しかも伝達された内容が、必ず、その後の何らかの

1) “Terminology of Documentation” UNESCO. ユネスコ情報管理用語集。日本科学技術情報センター。日本ドキュメンテーション協会、1984.04.

information
 knowledge (1, 2); data (2); meaning (3);
 information process (4)
F information; renseignements (1, 2);
 processus d'information (4)
D Information; Wissen (1); Daten (2);
 Informationen (2); Bedeutung (3);
 Informationstätigkeit (4)
R информация; знания (1, 2); данные (2);
 сообщение (2); информирование (4)
S informació
 17-27 (1) *Facts* being communicated
 DEF: 12-17
 REF: recorded information 17-54 (NT),
 scientific i. 17-60 (NT), specialized i. 17-
 62 (NT)
 17-28 (2) A 'message' used to represent
 a *fact* or *concept* by the unity of a 'data
 medium' and its *meaning*
 DEF: 12-17, 12-05, 14-27
 REF: machine-sensible information 17-38
 (NT), scientific i. 17-60 (NT), specialized
 i. 17-62 (NT), recorded i. 17-54 (RT)
 17-29 (3) (in data processing) The *meaning*
 that a human assigns to 'data' by means
 of the conventions used in their represen-
 tation.
 DEF: 14-27
 17-30 (4) The process of communication
facts or *concepts* in order to increase *knowl-
 edge*
 DEF: 12-17, 12-05, 12-23/24
 REF: scientific information 17-59 (NT),
 specialized i. 17-63 (NT), communication
 17-04 (RT), process 17-32/33 (RT), com-
 munication process 17-08 (RT)
 17-31 (5) The increase of *knowledge* by
 'communication'
 DEF: 12-23/24
 REF: specialized information 17-64 (NT)

- 情報**
- (1) 伝達される事実(12-17)
 - (2) データ・メディア(17-13/14)の一貫性とその意味(14-27) によって、事実(12-17) もしくは概念(12-05) を表現するために使われるメッセージ(17-42/43)
 - (3) (データ処理において) 人間がデータ(17-12) を表現する際に用いる約定に基づいて、データ(17-12) に指定する意味(14-27)
 - (4) 知識(12-23/24)を増すために事実(12-17) や概念(12-05) を伝達する過程
 - (5) コミュニケーション(12-04) によって増加した知識(12-23/24)
 - (1) c f. ISO/DIS5127/1. 2-1982. 1. 1. 3-05
 - (2) c f. ISO/DIS5127/1. 2-1982. 1. 1. 3-06
 - (3) c f. ISO2382/1-1974. 01. 01. 02

図 1

判断, または行動を起さこせる“意思決定の基本的要素”(the basic ingredient of decision making)¹⁾ として重要な役割を果たしている。

例えば, 生物が外界の変化をキャッチし, それに適応した反応を起こすとき,

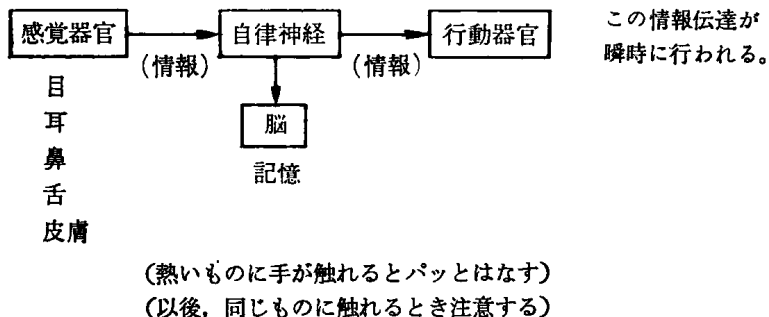


図 2

1) Becker, J. & Hayes, R.: Information storage and retrieval. New York, Wiley & Sons. Inc., 1963. p. 3. (情報研究会訳: 情報の蓄積と検索 日本経営出版会 1967 509 p.)

生体内に伝達される“何か”が情報である。人間（生きた有機体として）で言えば、自己の感覚器官を通じて、外界（自分の環境）を感知してそれに対応して生きていく。情報は個々の反応の決定に役に立つ。

（2）情報と伝達の意志

情報とは、必ず送り手と受け手の間に存在し、両者の間にそのメッセージを伝えようとする意志と、それを利用して何かの判断をするために入手しようとする意思がなければならない。すなわち、送り手と受け手の伝達（コミュニケーション）の意志によって、記号や、信号、文字のあつまりが意味をもつメッセージとなったものを“情報”という。

従来、こうした情報の伝達は、人と人との直接の対話によって容易に達成されていた。この方法は、送り手の意図どおりに正しい情報が伝達されたかの確認もできるし（即時にフィードバックも可能）、経済性、迅速性も高いので、有効な伝達手段として、きわめて原始的な手法でありながらも、情報洪水の時代といわれる現代でも情報入手

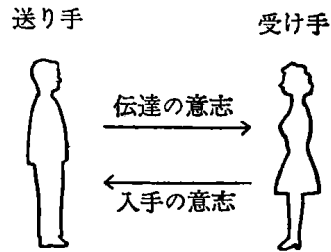


図 3

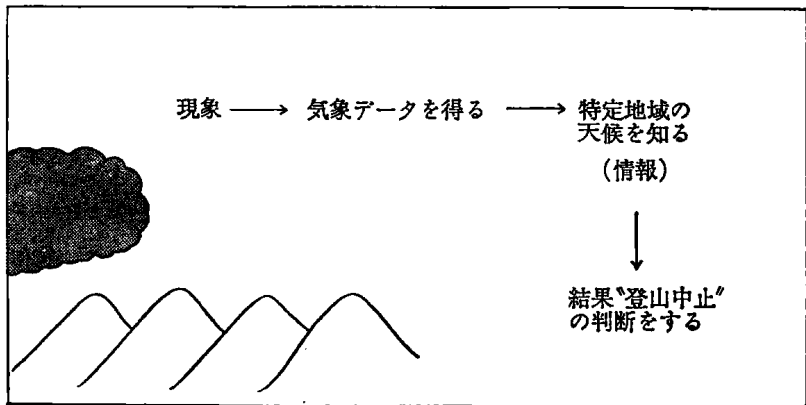


図 4

の必要性の高い研究開発や経済活動の分野で今なお、盛んに利用されている。

特定テーマの研究者が個人やグループで情報交換をする、いわゆる“invisible college”（見えざる大学）や、主題、目的、規模、構成など多種多様な会議が、年々、増加しているのはその例といえよう。

2. 情報伝達の歴史

そもそも人間は、自分の意志の表現手段として、送り手が受け手と相対して、言葉と身ぶりを使うことしかできなかった。原始社会での食料の所在、農耕器具の作り方、使い方などすべて、対面して口頭による情報で伝達されてきた。この方法は、伝達範囲が地理的にも時間的にも制約されていた。その解決のために、各時代、各地域で可能な手段で、情報の内容を記録する努力を行ってきた。

すなわち、古代エジプト文字解読の鍵となったロゼッタ・ストーンにみるように、歴史的に岩盤、粘土板、パピルス、羊皮紙など、それぞれの時代にその土地で手に入る材料を使って記録し、遠隔地にも、後世にも、彼らの時代の情報の伝達を可能にしてきた。

中国人による製紙法の発明は、“紙”という、記録しやすく、物理的にも取り扱いが容易で、運搬しやすい材料を提供した。そして、1440年代のグーテンベルグ（Johannes Gutenberg, 1398—1468）の活版印刷技術の発明によって、同時に多くの部数の記録ができるようになり、情報伝達の範囲も一挙に拡大された。

さらに、郵便システムの開始、交通運輸の発展による郵便のスピードアップと伝達地域の拡大は、記録情報の伝達をますます普及させ、一方、通信技術の進歩とコンピュータの出現により、情報の伝達媒体はさらに多種多様となり、記録情報ばかりでなく、多くの非記録情報が新しいコミュニケーション媒体（機械可読情報、画像、音声、映像など）として活用されるようになった。

3. 現代社会と情報管理

1950年代の米ソの宇宙開発競争を契機として、各国ともに科学技術の研究開発に力を注ぎ、研究者の数は増大し、大量の研究成果が発表され、的確で迅速な情報入手が最重要視されるようになった。必要情報と不要情報との選別および、特定情報を求める人への迅速な提供、この2つの目的のために、情報を収集し組織的に蓄積し、常に的確な情報の検索¹⁾、提供が可能となる状態に整備すること、これが“情報管理”であり、そのための一連の技術が“ドキュメンテーション”である。

情報管理に対する社会の需要は、その後、あらゆる分野に拡がり、この活動を、個人のレベル、グループのレベル、組織のレベルで行うことに力が注がれるようになった。1970年代に入り、コンピュータによる情報処理の実用化によって、国際的にも一段と推進された。

1957年に日本科学技術情報センター (Japan Information Center of Science & Technology) が発足したのも、日本の科学技術振興政策の一つとして時代の要求に応えた事例で、この分野の情報管理を、組織体のレベルで実施することを目標とした。情報センターという名称は、当時、耳新しく、その活動内容、図書館活動との関係などが論議されたものであった。

その後、1966年に、アメリカでは政府機関の各専門職種の内容規程集である“専門職務分類・資格基準”の中に、図書館専門職系列 (Librarians Series GS-1410) のほかに、新たに技術情報サービス系列 (Technical Information Series GS-1412) が追加された。当時、ドキュメンテーション、情報管理、情報サービスと呼ばれていたこれらの業務は、アメリカでは従来の図書館を母体機関としている事例が多い。しかし、その業務内容は流動的であり、その人材の確保や処遇にも不安定要素があるとして新しい基準が作られた。基準の前

1) 第6章参照